

下田市の「まちおこし」ヒアリング調査報告

寺村 泰

はじめに

本報告は、2008年8月に、下田市の「まちおこし」のために顕著な活動を行なっている4名の方々に対してヒアリングを行なった際の録音記録を文章化したものである。筆者は、2007年度より静岡大学人文学部経済学科の教員6名による「地域経済の面的再生に向けた政策提言の試み—熱海・伊豆を中心に—」と題する共同研究プロジェクト¹に参加しており、本ヒアリングもその一連の調査研究²の一環として、学生と共同で行なったものである³。なお、本報告の作成にあたっては平成20年度静岡大学人文学部経済学科競争的配分経費による助成を受けた。

お話を伺った4名の方々の略歴は次のとおりである。

田中豊氏は、下田商工会議所の副会頭であると同時に、中心市街地活性化法にもとづく「下田TMO(Town Management Organization)株式会社」の代表取締役社長でもある。下田の衰退を憂えて2004年に自ら中心となって下田TMOを立ち上げた。レンタサイクル事業、エコステーション事業、阿波屋再生プロジェクト、南豆製氷所再生プロジェクト⁴などの事業を展開

¹ プロジェクトのメンバーは、三富紀敬、寺村泰、鳥畑与一、川瀬憲子、太田隆之、小倉将志郎である。

² 本プロジェクトの成果としては、川瀬憲子・鳥畑与一「伊豆地域経済の面的再生に向けた政策提言の試み」(『静岡大学経済研究センター研究叢書』第6号、2008年3月)、寺村泰「下田市・地域再生ヒアリング調査報告」(静岡大学『経済研究』第13巻2号、2008年10月)、寺村泰・鳥畑与一「三島信用金庫・地域再生ヒアリング調査報告」(静岡大学『経済研究』第13巻2号、2008年10月)、太田隆之「温泉観光都市」伊東市の現状と課題—伊豆地域の面的再生のための政策研究に向けて—(静岡大学『経済研究』第13巻3号、2008年12月)がある。

³ ヒアリング当日の午前中は、ボランティア・ガイドによる「下田歴史散歩」に参加し、市内の歴史的遺産を中心に見学したのち、下田TMOが管理、運営する「阿波屋いっぷく堂」を来訪し、そこで昼食として「よろず交流館らくら」より取り寄せた「ハリス膳」を味わった。午後は、その場に4名の方々においでいただきヒアリングを行なった。ヒアリング終了後は、「よろず交流館らくら」に立ち寄ったのち、保存運動が行われている「南豆製氷所」を見学した。本報告で紹介する4名のほかに、ボランティアガイドとして清田康弘氏、外岡耕治氏、中村弘氏にお世話になった。暑い時期に特別にご案内いただき感謝に堪えない。また、南豆製氷所では、「南豆製氷応援団」事務局長をされている英(はなぶさ)みどり氏および山本氏に丁寧な解説をいただいた。すべての方に心より感謝したい。

⁴ 南豆製氷所は、2004年まで営業していた伊豆石造りの製氷所である。下田TMOは、市民団体である「南豆

している。阿波屋再生プロジェクトは、市内中心部にある元旅館で2005年3月から閉鎖されていた阿波屋を借り受けて、観光客用の無料休憩所として利用する事業で、2007年から営業している。ここでは、地場製品のところてんも提供している。2階の各部屋はところてんを注文すれば部屋代が無料で利用できる。

楠山俊介氏は、市内で歯医者を開業する傍ら、「下田にぎわい社中」という活動を1994年から中心となって行なっている。「下田にぎわい社中」は、オリジナル弁当「ハリス膳」や開国紅茶、日曜ひる市の開催、よろず交流館らぐらの運営など市民主導で住む人にも訪れる人にも快適なまちづくり目指して活動を進めている。3年ほど前にNPO法人化している。

森秀樹氏は、日本で最初の薬局となった自宅を黒船社と称して活動の拠点として、『下田ばなし』などの出版物の作成を行なうほか、玄関先に足湯を設置し観光客に提供するなど行政に依存しない民間主体の活動を行なっている。

志田保子氏は、下田花協議会の会長であり、花いっぱいを通りを実現することによって街のにぎわいも戻ってくると考え、自宅の壁にハンギングバスケットを据え付けてそれを花で埋め、近隣にもこれを広めた。いまでは「ハンギングバスケット通り」と呼ばれるほどになっている。

なお、録音記録を文章化するに当たり一部補正した。

<ヒアリング記録>

(寺村) 本日はお忙しいところお運びいただきましてありがとうございます。下田市において活発に地域活動を行なっている4名の方に、日ごろ地域でどのような活動をされているかということと、これからどのようにしていこうか、また現在ご活動をする上でどういうことが課題になっているかということについて、ご自由に学生に言いたいことを含めてお話をお願いしたいと考えております。4名の方に一通りお話をいただいてから質問等をさせていただきたいと思います。

それでは、まず、下田TMO株式会社の代表取締役をされております田中豊さんからお願いします。

(田中豊) 今、ご紹介いただきました田中です。あの、実はここ(阿波屋いっぷく堂)はですねTMOで運営しています。

でここはですね、何年前でしたか、4年前かな3年前かな?もうちょっと前でしたかね、商

製氷応援団」と協力し、リノベーションを模索した。その後、下田TMOは取得を断念し、撤退したが、現在も保存運動は継続している。

工会議所が、市の補助金をいただいて、3年ほど運営していました。

役所の補助金は大体3年で終わりなんですね。その終わった段階で、ここの場所も6ヶ月ぐらい実は、閉鎖して運営されていない状態だったんです。

で、そのときにですねちょうどTMOを立ち上げてまして、TMOで、じゃなんかできないかということで、トコロテン屋をやったらどう、と、ちょうどトコロテンがブームの時ですね。全国的にブームになった時なんですけど、その時にちょっと遅かったには、遅かったんですけども、その時にトコロテン屋をやろうということで運営して、今ではトコロテン屋と喫茶店、それからいろいろな方にご賛同いただいて、一応無料休憩所みたいな格好で、(観光客に)街中をあるいていただき、人はここへ来てもらえればトイレも自由に使っていいよ、というような形で運営をさせてもらっています。

今から事業をいろいろご紹介しますが、ここの運営だけ大赤字です。非常に難しいなあという風に感じてるわけなんです。で、資料のほうですけども、これは、設立時に作ったものです。この中にですね、当初、TMOのメンバーを公募しまして、30数名の方が集まってくれてまして、その人たちから出た、いろんな下田のですね、「こういう風にしてったらいいんじゃないの」という案の段階のもんですけども、それを纏めた物と、設立の経過等全て入ってますんで、後ほど見ていただければと思います。ちょっと重くて申し訳ないんですけど、もらってください。まだいっぱいありますんで。

それから、もうひとつですね、この冊子があるかと思いますが、これがですね、一昨年か、国の補助金を貰えまして、600万円ほどなんですけども、下田の町イコール旧町内言いまして、この旧町内の中に約1300件の建物があります。その建物を全部、正面からと左右両方から写真を撮りまして、全部調べました。その目的はですね、下田町遺産って書いてあるんですけども、世界遺産をもじった言葉ですが、要は世界遺産までいなくても、町としては、遺産として自慢できるんじゃないの、というような建物を探していく。表面的に見える古い建物、歴史建造物、そういうものはすぐわかるわけですけども、中には、昭和の時代ですんで、建物を建てて石のうえからそのままタンを張っちゃったりとかですね、そういうことをやってる家もあるというようなことで、全部調べ上げたものです。

(資料の)真ん中あたりに、こういう見開きのやつがあると思うんですけども、これのブルーの点が「なまこ壁」です。「なまこ壁」の家。それから、緑のところは「伊豆石」を利用したお店・家です。赤が「お稲荷さん」。「お稲荷さん」は、このへんは漁業は非常に昔盛んだったものですから「お稲荷さん」はかなり多くなっています。下田って言うと、たぶん「なまこ壁」

っていうイメージが強いだらうと思うんですけども、これで、とりあえずその、「伊豆石」のほうはるかに街中に多く使われてるよ、ということがはっきりわかるかと思います。あの、「なまこ壁」と「伊豆石」と合体したのも当然あるわけですけども、一応これをやりました、「南豆製氷」ってご存知ですか？知らない？今日行くのかな？「南豆製氷」っていう所謂「伊豆石」で作ったですね、昔の製氷所ですね。氷を作ってたところがあるんですけども、一応、その、屋根の修復の実験も、ボランティアでやりました。のべで約400人、中身ちょっと忘れちゃいましたけれども、12月の9日にスタートして、終わったのが1月31日です。約2ヶ月間、もうリタイヤした職人さんが中心になってやって来てまして、のべ236人ですかね、屋根は。後いろんな事をやってなんだかんだ400人くらいは、のべでボランティアで活動していただいています。で、国のほうに報告をした、ということで、まあ、一応国のほうからは結構褒められた事業でした。

で、もうひとつのこちらのほうのやつなんですけれども、全部で3枚ありますけれども、裏表になってるやつはですね。まあ後で、読んでいてください。今やってる（TMOの）設立（趣旨）を簡単に纏めたものです。

これで、下田（TMO）の設立当初からの経済状況とかも簡単に纏めてあります。今の事業ですけども、一応何のためにTMOをやっているのかと。中心市街地の関係ですんで、キャッチフレーズとして「下田にかつてのにぎわいを」という、この「かつて」というのもこんな「かつて」なんて入れちゃいかんとか色々問題があったんですけども、まあ、とりあえず…。昔はかなり、わたしの小学校・中学校の頃はかなりの賑わいがあった、今は、なかなか街の中に人が入ってきてくれないような状況です。ただ、ここのところちょっと人が増えてますかね？いろいろやって、昔ほどではありませんが多少増えてるかなあということです。

TMOつくりましたのは、とりあえず下田のほうでいつもいろんな計画をもう十数年前ですけども、ホントに計画書だけでこんなに積み重なるくらい1メートル以上なるくらいのもがあったんですけども、何も実行できないということで、基本的に小さなことでもいいから実行しましょうよというような意味合いで作ったものです。出資はですね、一応、下田市・商工会議所・各組合ですね。あと、個人の41名です。で、1000万円で作りました。ですから、基本的には第3セクターになりますが、当時はコレは国のお墨付きといいますかね、市町にお金がないものですから、民間がお金を出せば市のお金は出さなくても、県・国の補助金をもらえるよと、簡単に言っちゃうとそのような制度でして…。コレを作ってから、去年の3月で一応なくなりました、法律が。法律がなくなって、ちょっと制度が変わりました。

株式会社とかいう形ではなくて、「協議会」という形でちょっと制度を国のほうが上げて来たということです。これは、下田はそうでもないんですけども、他の所のTMOがですね、要はうまく機能していなかったというような現実がありまして、そのために、いわゆる協議会っていう町から何からいろんな人を全部ひっくるめた組織にきなさいよ、というような国の方向転換がありまして。それで、下田においては逆にですね、そういう制度のいろんな役の人がいてもですね、冠みたいな格好になっちゃうんです。実行性がなくてですね、そういうやり方はいやだよっていつて作ったものですから、ちょっと今のところ戻れないなというような感じで、市の方もちょっとお金がないものですから、なかなか動けないような形でいます。

で、今現在の事業内容ですけども、そこの1枚の紙ですけども、ここの食堂を運営させていただいてます。で、ここは今言いましたようにトコロテン屋と無料休憩所。それと隣みましたかね？エコステーションというのがあるんですけども、ペットボトルと空き缶を機械の中に入れますと、ゲームが始まりましてね、7本に1本くらいの確率なんです、それが当たると、各町月千円くらいで協力してもらってるんですが、商店の人たちのサービスが得られるということです。なかにはですね、すぐそこのお寿司屋さんなんかは1枚で太巻き1本。5枚ためると上寿司1人前サービスと。これ、かなりいいほうですけども、後はガソリン代50とかですね。そういうような物があります。が、はっきり言って、これは、ここで当ててもらって、例えばお寿司屋の場合でしたら、当たった券を持っていきますよね。普通は家族で行って、家族で食べてそのうちの1人前をサービスでもらう、というのをあてにしてたんですね。ところが、そんなに生易しくはありません。親がですね、子供をお使いにして券を持って「おい、もらってこい」といって、太巻きだけもらって食べる、というような状況で、評判がよくありません。いろんな、やってみないとわからないことがたくさんあるんですけども、一応そんな形です。

それからこの下にあると思うんですが、花の風車(かざぐるま)をやっています。これは、観光協会のほうで広井さん⁵っていう全国的にも結構有名な人がですね、下田に住み移られてきて、で、やられてると。ここに「本年度ギネスに挑戦した」と書いてあるんですけども、去年かな、今年かな、あの、小学校とかですね、町の人たちみんなにその、風車を作ってもらって、で、何千個かな？何千個を飾ってそこでイベントみたいな形でやる、っていうようなことをやっています。で、その一部がここにあるということです。

⁵ 広井敏通。ペーパークラフトアーティスト。

それから、先ほどいいました「南豆製氷」再生です。これも、伊豆石のやつで、製氷所がだめになりまして、閉鎖になりましてね。後で見てもらえればわかると思うんですが、伊豆石をふんだんに使った建物で、かなり規模的に大きいものです。たぶん伊豆半島のなかで1番大きい伊豆石で作った建物です。一番大きいんじゃないかと思っていますが。そこを何とか保存したいというような活動をTMOから始めて、いろんな応援者が出てきまして、今ちょっとTMOは離れちゃってますけれども、保存をしていきたいということでやってたんですけども、ちょっと市のほうにお金がないっていうことと、色々問題もありまして、現状、ちょっとどうなるかわかりません。ただ、壊す方向にはとりあえずまだ行ってません。ですけど、直す方向にもいってないというところです。現実問題、伊豆石の建物ですんでね、耐震は全然だめなので、要はお客さんを入れてくのに、耐震をしなきゃいかんと。その耐震とちょっとした屋根の補修だとか、そういうのをするのに1億5千万ほどかかる。そのお金がないということです。

それから、レンタサイクルというのをやってます。これは、道の駅の「ベイステージ」ってとこ、港のほうにあるんですけども、そこにですね、自転車を15台置いて。要は電車で下田に来る方は、街の中にひとつ貸しレンタサイクルのお店があるんですね。で、車で来られる方は大体道の駅のほうに駐車場が無料ですんで、そこに来るということで、そこからまちの中に人を誘導しようという意味合いで、レンタサイクルやり始めました。当初、あんまり売上もなかったんですけど、今年になってからですね、4月、5月、6月くらいは3倍ぐらいになってます。ですんで、すごくエコも手伝って自転車の人気がですね、かなり出てきてるのかなあという風な感じは受けてます。

あとはですね、地魚の関係で「めだい」というこの辺の地で獲れる魚があるんですけども、それを使ったバーガーですね。ふつう、あのフィッシュバーガーっていうと何の魚使ってるかわかんないと思うんですけども、その辺をみまして、この辺で獲れる「めだい」のバーガーというような形で、ここでも食べられます。それから、その上が、「魚屋さんマップ」。要は、お客さんが来たときに、魚を買って行きたい人が多いんですけども、どこで買っていいかわかんないという声が結構あったということで、この地域の魚屋さんのマップを作ったと。魚屋さん、干物屋さんですね。マップを作ったということです。これは、県の助成金でやりました。

それから、職人の店の再生。これはちょっと現実にはあまりTMOのお手伝いはないんですけども、下田にある昔からのですね、提灯（ちょうちん）屋さんとか鮎屋さんとかいうのがあるんですけども、いろんなお店があるわけですけども、まあ、そういうお店をうま

く再生して下田の顔の一部にしていってらどうかというような考え方でやってるものです。

で、今後重要であると思うことは、まあ、中心市街地になるべく多く拠点を作っていきたい。所謂「点」ですね。あの、よく「まちづくり」ですと、「点」より「線」、「線」より「面」というような言い方をたぶんされるかと思うんですけども、なかなか現状はそんなに簡単にいきませんで、「点」もできない、というのが現状ですんで、その「点」をどんだけ多くしていくかというのが、今課題になってます。

で、簡単に紹介しますと、今年じゃなくて、来年のですね、県でやります国民文化祭ってのが10月24日から11月の8日まで、3週間ですか、やります。全県でやるんですけども、その中で、下田はですね、街の中の旧町内の歴史的建造物だとか、空き店舗をうまく使ってですね、そこにこの辺、下田を中心としたこの付近でやられているアーティストの方が結構いらっしやいますんで、そういう方にお手伝いいただいて、各店舗を開いていただいて、それで、要は歴史的建造物をソフトと絡めてですね、やったらどういう感じになるかなあと、お客さんに喜んでもらえるかなあと、実験でやろうとしています。一応、現状の流れはそんなところです。私の方は、これで。

(寺村) どうもありがとうございます。質問は後でまとめて取りたいと思います。次は楠山俊介さん、お願いします。

(楠山俊介) 楠山です。あの、「下田にぎわい社中」と言う団体を3年前にNPOにしました。昨年、縁がありまして静大の人文学部の経済学科、地域政策とかいう学問あるのね。授業が。その講義を3回させていただいて、初めて静大の校舎に入って、皆さんと同じ人たちとあつて話をして、今日もこっからこうやって見ると、あの講義室の小さくなった感じでそういう表情で聞いてくれているなあと風に思っています。

にぎわい社中の設立あるいは活動、法人化への発展の意味というようなことですね、(資料に)書いてありますけれど、もう15・6年前からにぎわい社中と言う活動を始めまして、先ほどいったように3年ぐらい前に法人化ということで、NPO化してと、具体的な事業ということをしています。現状の中でですね、われわれも街づくりは何ぞやというようなことで、いろいろな先生から話を聞いたり、あるいは先進地の視察をしたりということで、もう10年くらいいろいろなことをしてきているのですが、結果、今いえることはですね、「やるかやらないか」っていうもう状況です、地域は。理屈はなしで、やるかやらないか、やるにつけては、各地域が一生懸命やってますから、参考事例はいっぱいありますし、その参考事例をどうやって自分の町に落とし込んで、自分らしい町のやり方に変えていくかっていう知恵は必要ですけれ

ども、もう、そういう状況。そういう意味からすると、NPOという法人化することで具体的な活動をしていこうと。で、しながらいろいろ考えていこうというようなところですよ。ですから、準備万端で何かをスタートするんじゃなくて、やりながらやりながら、ま、中身を充実していこうというのが現状です。で、まあその中でいろんなキーワードがあるんですが、まあ、例えば今日お昼にですね、折角だと思ひまして、キンメのお寿司とわさびの茎の巻物だったかな？を出してもらったんですけども、下田はキンメの水揚げが日本一と言ひながら、街の中にその食というものが落とし込まれていないというのが、もう10年ぐらい前の状況で、それを何とか下田の名物として皆さんが来られたときに、キンメを食べたいというような状況を作りたいということで、色々活動をして、今は、下田の飲食店に行くとキンメもありますし、観光の皆さん来られても、キンメを食べたいというリクエストが多いですし、その中で町の人も緊張感を持って提供してるというような状況があります。

で、例えば、そのおいしいものを食べるということで、食材はかなり下田にあるんですが、食事の伴のお酒という切り口で何かできないかなあということですね、下田地酒クラブというものを立ち上げてですね、ま、ここに蔵はありませんので、下田のお米でお酒を作ろうということで、今富士宮のほうの酒蔵さんをお願いをして、これも6年目に入りますが、これは作ってですね1タンク3000（本）ですから、3000（本）から今年は4500（本）作ったんですが、日本酒っていうこの技はですね、各ところでやっているんですが、ほとんど3年以内に無くなっているのが現状です。それは、なぜかという、皆さんもお酒飲むからわかると思うんですが、日本酒なんていうものは基本的に生鮮食料品と考えていいんで、年を越えていかない。その年の物はその年で飲みきってもらわないと、次の年の商品が出てくるんで、そういう意味からすると、今日本酒、皆さんも日本酒飲む方すごく少ないと思うんですけど、焼酎のほうに比べてね。そうすると、なかなか続かない、売れないで続かない。どうして売ろうかということで、会員制ということを取り組んでですね、個人や飲食店に会員になっていただいて、ということで、ま、そのおかげで6年続いて今度はその酒粕を使ってですね、飴をつくったり、2・3日前にやっと出来上がってきたんですけども、これから行く「楽座」においてあるんですけども、酒粕のアイスクリームを作ったりですね、あるいはこちらさっき言ったキンメとかその粕漬けとかあるいはわさびがありますんで、わさび漬けとかそういうようなことで、そのものをどんどん広めていくというようなことをしたりしています。

で、あと、下田の紅茶の会っていうのを作ってですね、やぶきた茶で紅茶を作ろうということで、これも静岡県内に何件もあるんですけども、下田も唯一それなりの茶畑らしいところ

があるんです、山の中に。もうほとんど静岡県も緑茶をどうやって売ろうかということで大変な策になっているところに、視線を変えて紅茶にしたらどうだろうと言うようなことがあって、紅茶の話をすると長くなるのでちょっとしませんけれども、ま、そういうことですね、「開国下田紅茶」ということですね、紅茶を作って、今度はその紅茶の粉を使って、うどん、「紅茶うどん」といううどんを作ったり、あるいはその粉を使ってケーキを作ったりクッキーを作ったりというようなことで、そういう風にひとつのものを広げていくというようなことをしています。

あと、先ほど言った、去年、講義のときにも使わせてもらったペーパーなんですけど、観光地作りだとか地域づくりいろんなものを纏めたペーパーが1枚あると思うんですけど、その中ですね、1番下にですね「持続可能なまちづくり」って言うことですね、わたしがあえて皆さんに「まちづくり」の勉強をしていただいてですね、これから、何かされるのに、ま、わかってほしいなというのがあるので、それだけ最後話させていただきます。

まず、「まちづくり」やったりとかですね、いろんな活動をやって成功するっていうことがあるんですけど、「成功」っていうのはなんだろうと。要するに「目的を達成した」っていうことは何だろうということがあるんですけど、なかなかね、その「成功した」という状況がわからないことがあるんですね。ですからきちんと目的を持つべきなんですけど、ひとつは、やっておかしくなってくるのは、「手段」と「目的」が混同してしまうっていうことがあるんですね。例えば、イベントを起こしますね。我々も今、街の中で月に2回、地場産品だとか、あるいは近隣の農漁村の人たちと交流もってというようなことで、市を開いているんですが、そういうイベントを開いていくと、どんどんどんどん、イベントをやるのが目的になってしまうんです。そうすると、イベントがうまくいかなくなってくると、もうやめてしまおうってなるんですね。そうじゃなくて、もとの目的は何のためにこのイベントをやろうと思ったかと考えれば、この手法が間違ってるのなら、違う手法に変えればいいんであって、そのものを全部あきらめる必要はないんですけど、どうしても、そういう「手法」という「イベント」を「目的」に考えてしまうと、ものは上手く行かないと、やめてしまうということになるので、その辺のところが一番重要だなあという風に思います。

それと、もうひとつは伊豆のね、下田もそうなんですけど、伊豆や下田の強さっていうのは、ものすごく底が深いんですよ。重層的な魅力をもってる、ここの町は。ですから、そのいろんなものが重なりあってあるんですけど、その分こういういくら不況になってもお客さんがまだ来てくれる。ただ、昔より半分になり3分の1になり、4分の1になりって減ってますけれど、

来てない観光地に比べれば、まだまだたいしたもんなわけですね。それは、どうしてそうなったかと、この重層さのものなんですね。町っていうのは、あるいは人っていうのもそうだし、純化すると目立ちますけど、例えば夕張の炭鉱の町とかあるじゃないですか、因島の造船の町とかああいう風に純化するものすごくインパクトあるんですけど、そのものがだめになったら全てがだめになってしまうという弱さがあるんですね。で、それが伊豆は何かの町って、海もキレイだし山もあって川もあって、それで食べ物も海だけのものじゃなくて、畑・山のものもあって、四季折々それぞれあって、そうなったときに、「これだ！」って言い切れないところがあるんですけども、その強さがあるんですね。だけど、もうひとつは大変さがあって、そこからもう一回特化してもう一回外にアピールしようと思うときに、特化しにくいんですよ。それぞれが力持ってるもんで。でも、そこから何か特化させないと、外にはアピールできないんで、これが下田とか伊豆で「まちづくり」をやってるときの、ある面の大変さがあるんですね。特徴をなかなか出し切れなくていう、あるいは出すための努力がものすごく大変だということ。

それと、もう最後ですけど、ここでやられてる方みんなそうなんですけど、物をやるときに「人」と「物」と「金」っていうものが揃わないと、ものはできないんですけど、それがなかなか揃わないんですよ。あるいは揃っても足りないっていう状況があるんですね。その時に、その団体なり、活動が続けてくための最大の要素は、そこのリーダーが中小企業の親父になったつもりでやるしかないんですね。で、中小企業の親父さんて言うのは、大企業の社長さんと違って、自分で金を出して、自分で汗をかいて、自分で一番朝から晩まで動かない限り、だめなんですね。だから、こういう活動も、そういう風にやらないと人も物も金も集まってこないんです。それは、ものすごく大変なことなんですけれど、ま、仕方のないことで。ですから、なるだけいろんな人として、いろんなお金を集めて、そしていろんな素材を集めてってやろうとがんばってはいるんですけど、まあ、思うとおりに行かないのが現実です。まあ、思うように行かない大変さの中でがんばってるっていう、そしたらどう工夫をしたらいいかっていうのを皆さんが勉強して、ある意味教えていただければありがたいなという風に思います。以上です。

(寺村) ありがとうございます。次は森さん、お願いいたします。

(森秀樹) 「黒船社」の森でございます。大体、「黒船社」というのは、もともとうちの親父が「黒船」という雑誌を出して、自分の家を「黒船社」という名前にしてましたもんで、そのまま私とその名前をここ3年位前にまた復活しまして、「黒船社」っていう……。じゃあ、「黒

船社」っていうのは何をやってるのかっていうと、別に何をやるっていうあれはないわけです。一番最初に楠山さんが言ったようにですね、これからはもう、今まではどちらかというと行政を主体に行政のほうから金をもらって補助金をもらって何かをやるというそういう時代は、もう全然無いわけですね。で、今どちらかというと民が主体にならないと絶対に「まちおこし」とかそういうものはできないという、もう、行政のほうは監督上の、いろいろな法的なものとかを応援していただければいいと。

私はもう、3年前からこういうことを始めたんですけども、その時点から、民間が主体でやらなければいけないということで、そのなかでこの下田っていうのは、非常に今歴史的なものっていうのが、ものすごくあるんです。で、例えばねここの「阿波屋さん」っていうのは、もともとが、まあ表に書いてありますけれども、阿波の国の定宿だったわけですね。ここの先代っていうのが、写真屋さんでこの下で旅館と写真屋を両方やってたんです。で、日本の写真の元祖の下岡蓮杖さんの一番弟子だったわけですね。で、そこまでは一般的に歴史的な書物に書かれてるわけです。じゃあ、下岡蓮杖さんが下田に行った時に、必ずここへ寄ったわけですよ。で、あの方は非常になんもどきが好きで、ここへ来ると必ずなんもどきを、ここのおばあちゃんが出して食べたという、そういうちょっとした話っていうのは、なかなか歴史的には残ってないわけです。例えば、ご存知だと思うけど、下田ってのは「唐人お吉」から始まったわけですよ。「唐人お吉」が非常に酒が好きで、最後の時にはもうアル中でどうしようもないという、その時に飲んだ酒ってのは、剣菱かな？つまみは、お線香。あの、焚く線香。あれをつまみにして酒を飲んだっていう、まあホントかわソかわかんないけれども、だけでも、昔のいろんな雑誌なんか読むと、そのお吉の近くにいた人がそういうことを喋ってるんですよ。そういうものってのは、なかなか歴史的には残ってない。

で、私はそういうちょっとしたエピソードとか、おもしろいものを町の人たちが受け継いでいかないと、もう消えてしまうということで、現在下田のなかで一番そういうことを知ってる方ってのは、84歳の方がいらっしゃるわけです。この方はどちらかというと、官と民と分けたときに、民のほうの話を非常によく知ってるわけですね。だから、ここの通りがどうだったとか下田の町をこう見てみると大体碁盤の目のようになってるけれども、例えばそこのこの角なんかはちょっと出っ張ってるんですよ。で、一般的には敵が攻めてきたときに敵をよけるために、道路が素どろりになってるんじゃなくて、ちょっとこう出っ張ってできてるっていう。ところが、その方に聞くと、そうじゃなくて、土地の争いでもって「ここは俺の土地だよ」って段々前に出てきたりして結局、碁盤の目がちょっと出っ張った形になってるっていう風な、

そういうエピソードでもないけれども、いろんなその、あんまり知られてない話を勉強して行くってことで、3年前から「下田今昔問わずの会」っていうのを私は始めて、で、その先生に月に2回来てもらって、2時間ずつうちで話を聞いて、これも勝手に参加して下さいと、参加したい方は、ずっと今でもそれを続けてる。

最近やってることは、「ジャカラントのまち作り」っていうことで、これは日本の樹じゃないんだけど、あの、静岡で、静岡の駅前のお寺ありますよね。知らない？名前忘れちゃったけど。それにね、ジャカラントの樹がね毎年もうかなりね、あれ年数が30年以上たってるから、きれいな花が咲くんですよ。紫色の。で、私も何回か行ってるんだけど、そのジャカラントの樹を、その、下田にあれしようっていうことで、今年、170本植えました。で、最終的には1000本下田に。下田ってのは、1市3町が合併したのを見越して1000本っていう。だから、松崎から河津まで含めてね1000本くらい、そのジャカラントの樹を植えて、ジャカラントのまちを作りたいっていうことで、今年スタートして、今大体170本。とりあえず今年植えたんですけれども。これも、咲いたら最高の。もちろん咲くまでは私ら生きてないけんね。10年以上かかるから。だから、一応そういう形で、まあ「まちづくり」を1つにしていきたいと。

それから、おそらく通って来たと思うけども、足湯がここの通りに3箇所ありますよね。手湯が6箇所ある。これも、私は、その商店街の中に足湯っていうところがあるのは、絶対に日本中探しても無いだろうと（思うんです）。旅館はあるんですよ。北海道の旅館なんていくと、必ず旅館の前に足湯と手湯がセットであるんだけど、商店街の中に足湯ってのがあることは、まず無いだろうと。まずは下田ってのは何でも日本一、日本最初の町だから、とにかくやってやろうっていうことで、今年2月に温泉を利用して作りました。

で、最終的には私はあと何年生きるかわかんないけれども、2・3年うちにどうしてもやりたいという形はね、下田ってのは、今楠山さんの方から話があったように、山があって川があって海があるんですよ。それにプラス温泉があるわけ。こういうところって、全国探してもそうはないですよ。で、そこで、癒しと健康の町を作って行きたいというのが最大の私の願望でもって、今、そういうものに対する準備を少しずつ始めてます。あとは、何か質問のときに。

（寺村）どうもありがとうございます。では、最後に「ハンギングバスケット通り」の志田保子さん、お願いします。

（志田保子）私は「下田市花協議会」の会長をさせていただいております、志田と申します。

「ハンギングバスケット通り」ってのは、花協議会の中の一角としてあるものなんですけれども、「花協議会」っていうのは、はじめは、行政と振興公社でこの街の中に、花の会とか商店とか老人会を主体として花を配布しておりました。それが、中心市街地活性化のために、平成13年に行政と、今までは団体を主体ですけど、同じ団体でも市民と行政が一体となってという感じで、「下田市花協議会」が平成13年6月に発足いたしました。

その時は、行政と振興公社の花の両方の方から配布がありまして、花はたっぷりありました。行政の方では、桜草とペチュニアの花の配布がありまして、振興公社の方からは6種類くらいの花がありましたから、ほんとに、すばらしいスタートだったんですけど、会員は10団体しかございませんでした。おかげさまで、今その10団体が、50団体ございまして、そのかわり、市の方からの配布がはじめは2万株ありましたが、今は5000株しかございません。団体は50団体に増えましたんですけど。そして振興公社の方も、無料配布のほうがなくなりました。

一応、私たちの協議会のちょっとストーリー（の説明）をさせていただきます。皆さん、街の中を見たと思いますけれど、下田の街の中で、花壇を作ろうと思ってもスペースがございませんから、花壇って作れませんよね。そのために、軒下緑化、軒下を利用してプランターで花壇を作っております。そして、平成13年にスタートしましたんですけど、平成15年に、ペチュニアと桜草を花協議会で配布してるんですけど、プランターだけでは寂しいなあって感じで、その主体花に「ハンギングバスケット」をやり始めました。でも15年のときには「ハンギングバスケット」って言っても、誰もわからないんですよ。

そして、17年に2丁目と3丁目に新しい街路灯が付きましてもので、そここのところに、街路灯に「ハンギングバスケット」をつけまして、少し「ハンギングバスケット」が皆様にわかってきたかなあって思ってきたときに、17年に県で「花と緑の伊豆作り」の推進事業として「ハンギングバスケット」について東部で講習やったんですよ。下田は入ってませんでしたけど、よそでは（会員が）集まりませんでした。うちの方は15年度から「ハンギングバスケット」をやっておりましたので、おかげさまで会員が集まりまして、どうにか、皆様に歓迎されるような「ハンギングバスケット」作りができたんです。

皆さん、今日見て歩いて、何でこの下田にはグリーンバンクのプランターがあるのかしらと、思いませんでした？なんか、花があると下の方にグリーンバンクのプランターに花が植わってたと思うんですけど、18年にグリーンバンク創立30周年のときに事業として補助金をいただきました。そして、この花作りをやっている、ただの花作りだったらどこでもやっております。

ますよね。下田ってのは、黒船ってものがメインですもので、黒のプランターにラップを巻いた感じでプランターを作りまして、街路灯のラテスからラットに、船の舵ですね、舵に「ハンギングバスケット」を展示して、やはり同じ展示するにも下田らしさっていうものを作るような感じで「ハンギングバスケット」をやってる次第でございます。そして、グリーンバンクのときに250個のプランターを配りました。そして、それは30周年で1回しか補助金はございませんでした。でも、昨年また補助金を取りまして。それはなぜかって言いますと、来年「フラワー都市」が下田で開催されるわけなんです。「フラワー都市」というのは、北海道から沖永良部までのところで参加している花の会なんですけどね、その協議会を来年やりますもので。やはり、下田でやるときに、その時にぽっとプランターを置くような感じじゃなくて、市民が皆さんで作って心を込めた感じのものを展示すれば、街の中がなにげなく和やかになるんじゃないかと。やはり、持ってきたものをぽっとやっても、やさしさはありませんよね。手にかけて一生懸命やれば、その中が和やかになって、街の中の流れる空気が変わってくると思いますよね。ですから、きれいだなって感じより、自然体で感じられる街づくりをしたいなあと思って私はやっております。

(写真を見せながら) あ、ちょっと「ハンギングバスケット」のこれ、一応ね5月4日に配布するのがペチュニアなんですね。11月に桜草を配布しまして、そして4月にペチュニアを配布しまして、7月に今度は今咲いてますベコニア、そういうものであれするんですけど。。これがちょうど私の家の前です。前のとこなんですね。そして、ここが、この商工会議所。今私たちの1人でやってるのがね、ここにプランターを入れて、ここにプランターカバーを作りまして、このプランターカバーの中にスタンドを立てまして、そして、このスタンドの中にハンギングを入れてるんですね。あ、こういうものをただ飾るだけでは絶対いけないと思うんですよ。台風が来ても倒れない感じにしなければ、何か1つ起きたら町全体でやってることですから、すぐ、ペケになりますよね。絶対に故障が起きないようにここに街路灯のところにハンギング飾ってありますけれども、人間がこうやってやっても落ちない感じに。あ、町全体でやってく場合はただ花を飾るだけだったら絶対にいけませんよね。必ずそれに安全性が無かったらいけないと思います。

そして、「ハンギングバスケット」っていうものをね、すごく手がかかるんですよ。地に植えるのが花ですよね。それを逆らって空間にやるってことは、枯れや、お水も欲しいし、そして、お水がたまったら根腐れをするから、捌けやすい土が欲しい。そして、手がすごくかかる。お金がかかる。でも、そういうものをやってくからこそ、街の中がだんだんと潤ってくると思

うんですよね。あの、ホントこの花をやったおかげで、この下田市の中が、なんとなく右から左、「こんにちは、今日は花がきれいに咲いてるね」「だめになったね」って会話がすごくできるようになりました。そして、観光客の方たちも、「ハンギングバスケット」、これどうやってやるの?という会話になってきました。ですから、お花だけでは、あの、下田にいろんな名所・歴史とかそういうものがありますけれど、私たちはそれを見に来た方々が、少しでも和やかにできるような感じで花協議会は花作りに協力しております。そして、一応これやってくのには資格がいりますよね。ですから私も「ハンギングバスケットマスターズ」だとか「グリーンアドバイザー」、このあいだも更新に行ってきました、千葉大の教授と農大の教授の講義を聴いてきました。このペチュニア、私たち、ペチュニアをやってますっていいましたよね。遠藤ミツオ(?)先生ってのは、日本でも世界でもペチュニアの第一人者の方らしいんです。その方の講義を聞いてきたんですけど、皆さん、サフィニアって聞きますと、サフィニアのほうが先だと思えますけれども、必ずペチュニアが主体でサフィニアであって、もうどこに行ってもペチュニアなんです。原木はみんなペチュニアからいろんなものが分かれていって、今何千種類ってありますけれども、原木は全部ペチュニアなんですね。ですから、私達も、年に2回の花協議会での花の配布で、3年間だけは「フラワー都市」のためだけにペコニアをやっておりますけれども、あの、これからはそういうものをどうやって生かして、自分たちで反映しながら自分たちで作りながらどうやって、やっていこうかなって……。ただ、もらうだけじゃなくて、どうやって増やしていって、どうやって成果って感じで物事を……。そして、今やってるペチュニアを今度は掛け合わせて、自分たちで下田に独特の花ができればまたいいなあと考えております。また、後ほど質問がございましたらよろしくお願ひします。

(寺村) 一通りお話しいただきましたけれども、質疑応答に入らせていただきます。(学生の) 皆さんの方から、気軽な思いついた質問で結構です、ぜひ出してもらって、お話を伺いたいと思います。

(服部) 先ほどの街の中を歩いたんですけど、「なまこ壁」の中にはちょっと手入れが行き届いてない感じのものがあつたりしたんですけど、ああいうのは、基本的にオーナーさんの意思で直す、直さないってことで、止めてる状況なんですか?

(田中) 現実的に、そうですね。あの、一応市のほうにですね、歴史的建造物に関しては、補修費を補助する制度はありますけども、年間200万かな?ということで、ほとんど使われてるんでしょうけど、十分じゃないでしょうね。当然、結構お金かかりますんでね。所有者の方の一存でという話になってきます。それを、何とかしたいっていうんで、要はこういう活動を

しながらね、市にもっと金出させようとしてるんですよ。

(寺村) 年間200万というと、トータルで200万？

(田中) 1件も200万だとおもいますよ。で、予算も200万しかないはずですよ。確か。(笑)
全体で200万。上限でも200万。(笑)

(森) 「なまこ壁」のね、要するに職人がいないの。あれを作れる人間が。下田、1人くらいかな？要するに、そういう建造物の修繕するのに、補助金っていうのがそのくらいしかないわけ。一方で、建物はどんどん壊れていってるわけ。で、今年ね、1軒潰したんですよ。何でか知らないけどね。査定っていうか、それをするね、委員会があつて、何年かずっと開かれてなかった。今年ね、何年ぶりかにね、その委員会が開かれて、委員になっちゃったわけ。1件だけね、持ち主から申し出があつて、保存できないと、壊したいと、それに「残せ」とはいえないわけ。どかしますっていう、どかしちゃったんだけど、だけどその、建物自体が雨は漏るし、あれだから、今度は危険性があるわけ。隣近所からは、何とかしてくんないかとは言われるし、持ち主はそこに住んでないから、空き家になってる。だから、そういう風にいろんな問題があつてね、あれを保存するのに1年間に1件について1000万出してもおそろくね、難しいと。その辺のギャップがね、大変難しいと思いますよ。

(田中) 中にはね、寄贈してくれたりとかね、そういう人たちもいますんで。下手にもらえないっていうのもあるんですよ。(笑)

(楠山) あのね、下田にはね、なまこ壁っていうのがたまたまあるけれども、通りとしてあんまり出してないでしょ、見た感じね。で、その街の中に「さいちゅう」さんっていう、その人のところは海鮮問屋だったから、やっぱりその格式が違うんですね。建物のね。面積から建て方からなにやら。ただ、他の人たちは、基本的に自分の家として作っているから、神社仏閣みたいに残すために作ってるんじゃないじゃないですか。で、今度行く南豆製氷ところに、写真が、大正時代の写真が大きく飾ってあるから、あとから見るといいです。その当時は全部その、なまこ壁の家です。全て。

で、今度なまこ壁っていうのはどういうのになるのかっていうと、いろんな用途があるんですけども、ひとつは防火上の建材だったから、こういう港町とか漁村とかというところは、小さなところに家がひしめき合ってるでしょ？そうすると、1件火が出ると、だぁ〜と火が延焼していくわけですよ。それを防ぐために、ああいう、燃えにくい材質で家を建てるってことをしてて……。ですから、逆に、農村に行くと家はなまこ壁の家はほとんどないです。板と茅葺の、ただ蔵だけは石となまこ壁で作るんです。それは、蔵っていうのは昔はほんとに金

庫みたいな、家に大事な物は全部納めてく倉庫だったから、燃えないようにお米なんかも全部蔵に備蓄したわけだからね。そういう風な建材の用途があって、下田の町っていうのは、さっき言ったように、格付けがある建物はすごいけど、みんな生活してて、で、ある意味この南伊豆地域の中で、この下田、さっきね言葉の端々で「旧町内」って言葉が出るでしょ？昔ね、下田町があって、周りに6村・5村かな？要するに、村がある。それが昭和の合併で下田町になって、そのあと四十何年かに下田市になったのね。で、その昭和合併のときに、村と町が合併したときに、ここが町だったから、で、旧の昔の町っていう意味で「旧町内」って口で言うんですよ。ここの場所をで示すのにね。

ここは、南伊豆地域で豊かだったんです。やっぱり、南伊豆地域の経済の中心地だったし、そういう意味でね。そういう意味からすると、なまこ壁の家を、どんどんどんどん新建材に変えてく経済的な力はあった。でしょ、そういう時代の流れの中で、建替える人はするよね、どんどんどんどんね。そういう意味で、残っている人はある意味、きちっとした建物を建てたか、建替えられなかったか人か、そういうのも普通の状況なんですよ。要は、各所も、その川越の蔵の町とか言うでしょ？長浜のとかいうでしょ？あれ、ほとんど1週遅れのトップですからね。過去、川越、私も昔の学生の頃川越に居たんですけど、あのころ、あの16号線、今蔵の町って言われてる建物は、もうトラックが走って外が埃だらけで、それを一切洗うなんて行為は一切してなかった。要するに、いつこの建物壊そうかなあ、いつ建替えようかなあ、でも金がないからしょうがねえ、ほっとけや、って話。それが、あそこは都市計画が入って、何とかこの町をっていったときに、みんながそれを評価してくれて、今ああいう風にリニューアルをして、蔵の町になってるんだけどね。だからね、1週遅れのトップっていうのが、全国でね、さも1番みたいな状況があるんだけど、だから、変に経済的にね、ここは豊かだったんで、残るものと変わるものがちょっとアンバランスになってはいるんだけど、その中でも、もともとなまこ壁いっぱいあったから、だからまあ、残ってる、ということ。だからね、意図的に残してきたっていう町じゃないんだよ。

(田中) 逆に言うとね、大正、昭和あのへんのね、流行の建物が全部揃ってる。逆に言うとね、そういう見方もできる。建築家なんかの人は、結構おもしろがりますよ。

(寺村) そうですね。タイルが流行った頃の家と・・・。

(田中) トタン板もあるしね。さっき言ったように。残ってますし。

(寺村) 私、1言皆さんにお伺いしたいのは、やはり、こういう「まちおこし」の活動を始められた動機といたしますかねえ、きっかけっていうのがあるでしょうけど、あるいは、やってて

それを続けている情熱の源は何なのかとかですな、ちょっとそういった所を。一般的には今の社会の中で自分の得をすることはするけど、損をすることはあんまりしないとか、というか得することしかやらないというか、まあ学生だって就職のために、自分の就職のためにとりあえず一生懸命だとか、単位とるために一生懸命とか、そういう生き方をしているような日本社会で、それがごく普通なことだとは思いますが、そういった中でそういった活動をやられている。まあ、なんといいですかね、情熱というのがどっからでてきてるのかなっていうのが、まあ、非常に雑駁な質問で恐縮なんですけれども、1人ずつ教えていただけたらと思います。

(志田) どうぞって言われても困りますけれども、実のことをいいますとね、私はそういう人間じゃなかったんですよ。私はどっちかって言うと、今はおかげさまで下田の街の中を地に足を着いてあの、生きてる人間ですけれども、私も上だけしか見て歩かなかった人間なんです。太陽は自分のために回っているような時代がずっとありました。私も、職業はニット関係の者で、ですから全国区でトップを取ろうっていう頭しかない人間でしたんですけれども、私の人生が変わったのは、主人が15年前に亡くなったことなんです。そして、ちょうど7回忌が終わったときに、この「下田市花協議会」っていうものができたんですけれども、その花協会ができる前に、先ほども言ってましたように、行政と振興公社で老人会とか商店・花の会とかの人たちに無料配布があったんです。私たち市民は、何故私たちにこういう花の配布がないのかしら・・・って言って、たまたま来年私が町内会長になるから、市に聞いてみるわっていったときに、伊豆新聞って言う新聞に200本で5人くらいの団体に配布しますって言うのがあってね、それで無料配布がキッカケだったんです。そして、それが4月に発足しましたら、6月にそこに入ったものですから、市のほうから「花協議会」っていうのがあるから出てきてくださいって言われたときに、私、実のこといいますとうちの通りで1団体じゃなくて2団体、200株じゃ足りなかったんで2団体作ったんです。でもんで、2団体作ったもので、無理やりに10団体しかなかった中の2団体持ってましたもんで、花協会の会長にさせられたんですけれども、その時に花は3万株あったんです。人間は居ないんです。あの桜草3万株あるのに、まだ人間がいなくて、それから頭を下げて団体を起こしていったんです。そうして次の年に大野町って所に行ったんです。

そうしたら、大野町が岐阜の団体がやってる「ハンギングバスケット」をばらで飾ってあったんです。その「フラワー都市」の会場のところに。それを見てすごく私感動しました。下田の町のスペースがないときにこれを飾ったらどうかと帰ってきたんです。でも、

「ハンギングバスケット」っていうことを全然皆さん頭の中に無くって、それから1年たって皆さんに問いかけても「何そんなもの」っていう感じ…。人間って不思議ですよ。そんなもの」って言われると燃えてくるんですよ。それきっとね、皆さんから拒否されなかったら私、今みたいなこういった「ハンギングバスケット」通り作らなかつたと思うんですけど。それと、スペースが無かつたことと、両方だつたんですけどね。

やはり始めのときはほんと夢みたいな話ですよ。ね。「ハンギングバスケット」っていうこともわからないことだし、お金もいることです。でも、人間って一生懸命に、先ほど楠山さんが言っていましたけれども、私たち市民がやるときには10のものを10でやったら、何にもできないと思うんですよ。ですから私も、仕事を持ってる身ですから、夏だつたら朝4時に起きて（寝るのは）夜12時ごろ…。編み物といった資格は全部もってますけれども、花に対する資格は何ももっておりません。ですけど、やはり、リーダーになるにはやはり自分が（資格を）修得してなかつたら、皆さんに言うことできませんから、やはり、資格を取るにはやっぱり時間を割いて資格を取らなければなりませんよね。おかげさまで、「グリーンアドバイザー」とか「ハンギングバスケットマスターズ」だとか「庭具設計」だとか一応とることだけは一応全部とりまして。でも、そういう気がなかつたら勉強することもできませんし。

でも、一番大切だつたことは、やはり、自分のために物事をやろうと思つたら、絶対ものにはできないと思いますよね。あの、誰かのためじゃないんだけど、そういう気持ちでやると、必ず人は集まってきてくれるし、そして、自分が一生懸命やれば絶対人はついてきますよね。上になってただぐだぐだ言ってるだけだつたら、絶対人はついてきませんが、一生懸命やってれば、皆さんがお手伝いしてくれる感じで。おかげさまで私は、主人が亡くなって、母が亡くなって、子供がこちらにおりません。1人で生活しておりますけれども、この花のおかげで、近所、寝込んででもすぐ飛んできてくれる、コミュニケーションがすごくよくなって、思いやりがある通りにすごくなってきました。うちの通りっていうのは、今から7・8年前にはほんとにおっかいお店はつぶれてしまう、会社はつぶれてしまう、そして駐車場ばっかで、日曜日になると、人が通らなくなった通りなんですよ。おかげさまで花をやつたおかげで、皆さんがそれこそ、観光協会で配ってくださってるマップを持って通ってくださる。「きれいだね」って言葉をかけてくださる。そうするとやはり、こういう人たちは、もつときれいにしなければならぬなあって感じでなつてきますもんで。やはり、何かを圧を加えられると、人間っていうのは力が湧いてくるもので。そして、それで自分が10のものより少しあれすれば、皆さん協力してくださるようになりますんで。おかげさまで、今は、逆にこれやってよかつた

な。でも、これならまだもの足りませんから、もう少しがんばってやっっていこうかなって思っています。

(田中) 私はですね、実は高校から東京の方に出ちゃってるものですから、大学時代は遊びかけてまして、別にこんな「まちづくり」だとかそんなことをやるようなことは全然意識はありませんでした。長男なものですから、下田へ家を継ぐんで帰ってきました、言われたのが、青年会議所ってご存知ですかね？ JCっていう、今の、麻生さんか、麻生さんなんかも、全国の会頭をやられた方なんですけど、そこへ入れさせられましたね、周りの人から。別には私はその団体を全然知らなかったんですけども、入れさせられて、その中でいろいろ「まちづくり」の活動をしていったんですね。学校時代に要は、「まちづくり」だとか勉強してませんし、政治のことも全然勉強してない。

で、ここへ帰ってきて、こういうことに接して、まあ、いろんな先輩方についてって、ってことですけども、入っていった。ちょうど JC の理事長をやった時だったかな？理事長をやったそのあとにですね、40歳くらいのときに、下田グランドデザインっていうのを手掛けまして、まちのなか将来こんな風にしたらいいいねっていう、非常に無責任にいろんな絵をかいていたんですね。で、そこら辺りから、どっぷり浸かりはじめてる、ということだと思います。

(JCを) 卒業してしばらく休んでたんですけども、こんど、商工会議所のほうの副会頭をやれということと言われてまして、その時に中心市街地の担当になりましたね、そこから再スタートして、今に至る、ということ。まあ、気持ち的には、そうですね、青年会議所で教わった中で、どんどんどんどん僕らの時代もときに、町が目に見えるように景気が悪くなっていったんですね。で、これはどうにかしなきゃならないというような気持ちが一番強かったかなあという気がします。今もまあ、出来てませんけれども、それでも少しづつ民間で活動して、現状になって先ほど、森さんのほうからありましたけれども、民が動くって役所も動いてくるっていうのは、多少実感しています。

(森) 私は3年前にね、鼻血が止まなくなっちゃって、静岡の日赤へね11月か12月にね、いったんですよ。そこで、もともとが薬と化粧品を隣でやってたんですけども、ああいう毎日いろんな方と接する商売ですから、要するに、1日でも2日でもお客さんに迷惑をかけちゃいけないっていうことで、日赤に入院したと同時に家へ電話を入れてね、「今日限り俺はやめるから」って言って、甥っ子にもう全部一切譲って、自分は静岡に1ヶ月くらい、静岡日赤に入院してた。その後、静岡にアパートを借りて1ヶ月くらいやっぱり(療養)してたときに、あの、それまでの間ってのはこういう「まちづくり」だとかそういうものてのは考えたことが無

いわけ。全然。全く無くて、ただ、仕事上ね、15年位前からマイナスイオンとか、水の勉強をずっとやってきたわけですよ。それでね、その結果、健康ってものに対して、いかにその、健康っていうものが重要かって言うことと、下田ってのは、うまくこうマッチしてるわけね。で、3年前にもう俺仕事やめるからって言ってぽっとやめて、それで、さっき言ったように、下田はこれだけの歴史もあるし、それから自然的な要素を持つてるからもっとこれを生かした何かをやってくべきじゃないかなと。だからまあ、あと何年くらい生きるかわかんないけれども、今私は68だから、まあ70になったらもうやめてしまうかなあと思ってるんだけど、そうすると、あと2年しかないから、2年の間にできることを全部やりたい。で、自分で「すぐやろう会」という会をつくった。で、よく皆さんに「すぐやろう会って、会員さん何人ですか？」ってよく聞かれるんだけど、「すぐやろう会」っていうのは俺1人で。なにかやるときに、それを応援してくれる人たちがその時点の会員さんだと。だから、ジャカラントの森作りって言うのもやるときにそれを応援してくれる人たちが、その「すぐやろう会」のジャカラントの会の会員さんだと。その、来月に入るとビックシャワーっていうのがあって、砂の中へもぐって砂の中で顔だけ出して埋まる健康法っていうのがあるんだけど、それをやるときに、それを手伝ってくれるひとが、その「すぐやろう会」のそのときの会員さん。だから、普段はあくまでも私一人と。で、思いついたらとにかく、すぐやろうと。で、「すぐやろう会」という形で。

今、さっき誰かからちょっと話があったんだっけなあ、今、昨日・一昨日から考えてるんだけど、下田ブランドっていうのを、作りたいと。何件かのお店を回ってるんですけども。下田には昔からある、なんていうの、染物屋さんとか、味噌を作ってるお店とか、ちょうちんを作ってるお店とかそういう、まあ、言い方は悪いけれども、ちょっと昔の時代のお店っていうのが、あるんですよ。そういうお店を、一括してね、「下田ブランド」っていうっていう名前、「下田ブランド」は下田の社長さんっていう名前か何かにしようかと今考えてるんだけど、そういうのをまとめてね、それで観光客にアピールする。そういうあれをなんとか2ヶ月くらいの間に作っちゃいたいなあというのでおとといから準備を始めてるんだけど。まあ、そういうわけでね、今まあ何しても年金で生活してるから、まあ、やりたいことを勝手にやろうと、いう形でやっています。

(楠山) 私は、あの、職業が歯医者をやっている、毎日毎日人の身を削って食べて居るんで、まあ、自分の身も削ったほうがいいのかなあというふうにして、街づくりをやっているという風にいえばまあ、あれですが。それはそれで、きっかけは先ほど田中さんから出ました、青年会議所のメンバーで、そこで10年ばかりいろいろな活動させていただいて、で、なかなか

か私は入ってよかったなあと思いますし、青年会議所が持つてる人材育成プログラムとうものは、たぶん、そういう類するものの仲では1番だろうという風に思っています。まあ、残念ながら、そういう会に今入る人も少なくなってきているようです。ただ、それをして、40で卒業というルールがあるんですね。例えばその、同じようなものであって同じようなものではないんですが、ロータリーとかライオンズっていうああいうクラブは、まあサロンのなものでやっていますけれども、まあ、定年の無い死ぬまでというものですから。青年会議所の場合には20歳から40歳とうことで、あの、そこをでまして、これで全て終わりじゃないだろうと、こっからスタートではなかろうかと。要するに、勉強させてもらったものを、いかに社会の中で、というようなことを偉そうに喋っていた手前、自分がやらなきゃならんだろうというところがありまして。まあ、それで、してきたところがあると思います。

その中で、こういう街づくりみたいなものは、さっき言った終わりが無いんで、あり地獄とか底なし沼みたいなもので、本来嵌ったら静かにしてりゃあよかったんですが、なんだかんだ動き回ったりもがいたもので、どんどんどんどん嵌り嵌って出られなくなってるというのが、状況です。それと、そういうものの中です、いろいろな人と出会ったということがあります。たぶん、まあ、まだまだ森さんみたいにあと3年で死ぬとか言うことはないんで、自分で反省するのも、総括するのも変ですが、たぶんこういう人に会って、というのがすごく自分が好きだったというんじゃないかなあと思います。今でも。きっと私はイベントとかなんとか、何もあんまり好きじゃなくても、人が好きなのかなあという……。いろいろな人と会わせてくれたのがこういう街づくりの活動だったりのような気がします。特に、我々、今NPOって言う形でやってますけど、基本的に無給で皆がボランティアでやって形になるということなんで、皆さん本業を持つてる人がいろいろ時間やお金を工面してくれて、参加してくれてるんですけど、そういう中でそういう人たちが、私の思ってるように動いてくれると、もう、これはもう無性にどうしたらいいかわからないくらいプレッシャー感じますね。もう何倍にもかえさなきゃいけないあっていうことで。そこのへんの間人間関係がまあ、どっかで楽しいのかなあって思いながらやってますけれども。ですから、さっき言いましたように、「人」と「物」と「金」が揃わないとものは成立しないんですけど、そのなかでバランスよくではなくとも、人が揃ってくれるとうれしいし、まあ金が揃うのもうれしいし、ものが揃うのもうれしいけれども、まあ、「まちづくり」の中で1番、順番をつけるとしたら、やっぱり「人」だろうなというふうに思います。我々の会は、そう、別に自慢してるわけでもないし、ただ無能だけだと思ってるんですが、一切公金に手を出したことはありません。全部自分たちの金です。で、公金をくれるなら、

ありがたくもraitたいですけれども、手続きをする紙が書けない。能力的に。あんなめんどろな申請書を書いて、報告書を書くなつて手間があるなら、自分の金を使ったほうがいいつていう、怠け者の集団ですんで。でもまあ、そうやつて頼らなければ、頼らないなりに、向こうから官も頼つてきてくれるんで。まあ、それはそれでそういう関係かなあという、思つています。以上です。

(志田) ちょっと一言いいですか？今、楠山さんの場合は頼らなくつていいましたけれども、私たちの場合はグリーンバンクつて言ひましても、ただでもらつてゐるわけじゃありません。必ず会費は三丁目花の会も2分の1以上もらう感じの、その会費も頭を下げてもらつて、自分はもちろん出してるよな感じで、ただで助成金をもらおうつて、そんな虫のいいことはできませんもので。それプラスボランティアの人の尽力ですね。やはり、お金が無かつたら何にも買えませんが。あの、はじめのときはね、行政の方で全部無料配布でしたんでよろしかったんですけれども、17年から花の協議会も1株の会費をとつてやつてます。そうじゃなかつたら、行政だけではできませんから、そしてこの「ハンギングバスケット通り」もグリーンバンクから助成金をもらつておりますけれども、それは、自分たちがやはり2分の1くらい会費を集めてそして、助成金をもらう感じ。そして、あとのものは自分たちが実費で出して、体はもちろんのこと、それもらった以外に会費以外に出すことはたくさんありますけれど、やはり、ホントは自分たちでやりたいんですけれどちょっとそこまでは自分たちでできませんもので。花つて、あの、普通だつたらプランター1個花を3個か4個入れればよろしいですよ。あの「ハンギングバスケット」は8個から9個入れるんですよ。そして、お水は夏だつたら朝晩やらなければならぬ、花殻摘みはしなければいけないから、すごい手間隙かかるんですよ。ですから、イベントではどこでも「ハンギングバスケット」をやつてますけれども、365日きれいにハンギングバスケットを飾つてるところは、そんなには日本全国ないと思ひます。それほど手がかかつて、また、お金もかけるけど、手もかかるのは3倍4倍かかりますので、でも、人ができないことをやつてくことたちが、私たちの、皆さんの夢でありますので、一生懸命やりたいなあとは思つてますけれども。

(田中) あの、ちなみに町遺産の復活プロジェクトは、100%補助です。一銭も出してません。あの、国は結構最近、そういうのはあるんです。県はたぶんやつてませんけれども。

(寺村) (今の質問は) 最後に出せばいい質問だつたかなあとは思ひんですが……。他に活動についてとか、あるいは歩いてきて聞きたいこと。意見でもいいですけど。他の方の質問ありますか。女性はどうか？楠山さんのを読んでると、女性層が求める旅の4点セットつて言うの

は「食」「遊」「花」「買い物」ってあるんですが。女房のことを思い浮かべると、そうかなとは思いますが。どうだろうねえ、町歩いてみて。こういうところもところこうしたらとかあったら。なにかない？

(志田) そうですね。若い人の意見聞きたいです。私もねどっちかって言うと、本当はねここで言うより、皆さんの若いエネルギーをもらいたくて参加しました。ですから、皆さんの意見を聞きたいと思うんですよ。

(楠山) 先生、ちょっといいですか？あのねえ、折角だけど。今街づくりやってて、まずちっちゃな町・村あるでしょ？そういうところの町づくりは、根本的に行政主導型です。で、その首長さんがものすごく何かに熱心だとか、そこに名物課長さんがいて、もうライフワークみたいにやるとか、あるいはちょっと離れると、農協とか漁協とかあるいは商工会とか、そういうところが何かこうがんばってる人がいてとか、そういう風にして村おこしてなってるところがほとんどっていうか、目立ってるところは、そうです。ですから、例えばネットとかだっているんな検索とか情報のなかに出てくる何とか県の何とか村とか山ん中とか海辺でこんな「まちおこし」があってこんなうまくやってるよって所は、だいたいそういう人間が居るんですよ。だから、その、民活なんていう民活とか何とかいったって、第一、人がいないでしょ。山の中に60以上のじいさんばあさん居るときに、子供は村をどういう風にしようかってその人たちにはもうできないよ。だったら、基本的に行政規模が小さくなってるところは、どうしても行政マンが有能でなければ、その町は動かないですね。だから、ある意味東京になってくれば、民っていうのがかなりあるから、行政がそんなに仕切らなくなっただけでできるのかもしれない。単なるコーディネーターをしてればいいのかもしれないけれどね。それが、1つね。

で、もうひとつが、みなさんたちです。若い大学生、これがいかに地域とかそういう・・・、だから、静岡県の中でも、「まちづくり」の元気な都市ってあるんですけど、ほとんど元気のひとつの原因は、大学を抱えてて、大学生と一緒にコラボしてるとこなんです。だから、この辺では三島、日大三島の学生といっしょにやってる。ね。例えば常葉でもそうで。産業大学。この前ね、「静産茶（しずさんちゃ）」ってでしたでしょう？ペットボトルを。産業大学が企画して、袋井・磐田、産業大学あのへんですよね、要するに、茶所なんで、大学生のアイデアを使ってお茶を。今、なかなか緑茶って売れないのね。だから、学生がからんでるっていう町、っていうことは大学があるっていうことなんです。そういうところがね、「まちおこし」はね、結構ね、いっしょにコラボできて、さっき言った「若い人の意見を聞きたい」というのも、ここら思いついたらこの（今日来ている学生に数）ぐらいしか下田に若い人いないぐらいなん

だからね(笑)。だから、ほんとにそれが大きい。

次が、女性ですよ。で、各地区に、「女将(おかみ)さん会」っていう言い方あるでしょ? 要するに、女の人、女性の感性でもういっぺん見直さないと、男なんてほんとに、根性無しですからね。売上が下がっただけで、もお奥で、ほんとに、テレビ見ながらじいっと黙ってるだけだから。ね。お客さん来た時に、女将さんが「はい、いらっしやいませ〜」ってお茶をだすでしょ? ね。そいでペチャクチャペチャクチャ喋って、また今度ねって何にも買わないで行くでしょ? 女将さんはそれでいいですよ。「ご馳走様。お茶おいしかった」って。旦那、金にもなんねえ客に、何お茶出してんだって。そこで夫婦喧嘩が始まる程度で。だから、これからはね、経済不況になってきて、サービスとかいろんなもう一回変えなきゃなんないときに、女性の感性ってのは一番強いんですよ。だから、「女将さん会」ができあがる街とか、そういう業界ってのは強いんですけど、なかなか下田それがないんです。このね、3つの「せい」(行政、女性、学生)。そういう意味からすると、下田って、結構特殊ですよ? これはね下田の特徴って、昔からね、民の、民の人たちが自主性があるって、こういう活動をどんどんしてくわりに、行政はほとんどついてこれないっていうね。だから、クレーマーじゃないけど、下田ほど民が行政マンを上からものを言うところはないと思うんですよ、私は。そういう状況です。

(田中) 専門はなんなんですか? みなさん。

(寺村) 経済学科の経済政策というゼミなんですよ。2年と3年がいるんですけども、3年は福祉国家の国際比較みたいなものを今年やってて、2年生が地域政策を今年やってみようということで、まあ、まだ始めたばかりなものですから、まだ基礎知識もそんなにはないんですが。一体何を質問したらいいかが、まずわかんないかもしれないと思います

(田中) あの、1番経験するのは、皆さん田舎はありますか? ありますよね? 田舎でボランティアを一回やってみるとかね。街の中で。そうすると、一番よくわかると。口でこうやって喋っていても、わかんないでしょ? (笑) と、思いますよ。

(服部) もう一回いいですか? 富士宮の方、やきそば学会の方に、そこは結構先行した例だとは思いますが、その方がいってみえたのは、あの、官民が顔を点き合わせて意見とかをたたかわせるような場があった。ということ伺ったんですけども、下田の場合は、今官民もそうだし、民の間だけでも観光協会とか民宿協会とか、いろいろ個人でやってらっしゃるかたもみいえると思うんですけど、そういう方が顔をつき合わせて、どういう方向性でいこうかっていうような話し合いをされたりとかいうことはされているのでしょうか?

(田中) あのですね。どういう、ま、もしかしたら私が思ってるだけかもしれませんが、どう

いう方向でいこうかっていうのがですね、あんまり、もしかしたらないのかもしれませんがね。ただ、個々にやってることが、皆突き詰めると同じ方向に行ってる。そういう感じに僕はうけとりますね。で、役所がちょっと1個にしぼれなくてね。行政はどちらかという社会福祉的なことがいちばんですよね。まず。ですから、その、今お金がないときなんで、要はいろんな事はできないわけですよ。こういうときこそ、やっぱりひとつの方向に向かってなるべくお金を、効率的に使うということが必要じゃないかなあと僕は思うんですけども。ただ、ここんこへきて、今までばらばらでやってきたものがかなりあの、民も官も含めてですけども、まあ、会議だとかいろんなことやり始めてますし、あの、まだ目的を突き詰めたら、みんなね、違うと思うんですよ。細かくいうとね。大雑把ではあってますけれども、一つ一つは皆違う。それがあの、重なって、いろんな団体がそういうの方向でやっていってひとつの方向に向かっている。そんなかんじですね。いいですか？

(寺村) ちょっと関連してお聞きしたいことあるんですが。あの、下田は結構、その、首都圏からの定住というような問題も、以前から政策的にもある程度やってきたかと思うんですが、外から来られた方が、こう、そういういろんな運動をされてたりするようなケースも、まあ、南部製氷なんかもそう、ある意味で、最初外からのからの人とかの意見が入ってるということもあるかと思うんですが、そういう、もともと下田に居て下田を愛して、自分たちの下田のまちを何とかしたいと思ってる人たちと、外から来て、それを何とかしたいっていう人たちと、いうのは、こう、うまく行くのかなって言うのはそのへんはどうなんですか。

(田中) 基本的にうまくいきません(笑)。あの、部落っていうか、田舎の人間なもんですから、結構普通排除しますね。排除する方向に向かいます。で、これはたまたま、私がやったやつはね、東大の建築家の人たちが中心になってるとこで、けっこう市長なんか一番最初に連れてきた人たちなんですけれども、そのなかで、すごく一生懸命まあ、やってくられるんですよ。で、ほんとにボランティアでお金がどうのこうのって話もないし。で、あと、好きな人、下田が好きで住み込んだっていう人は結構、チョコチョコは居ますね。そういう人たちが時たま出てきて、最初はいいんですけどね。なかなかあの、付き合い始めて、深く付き合いとだんだんそういう風になったりとかね。いろいろ、人間関係ですんで、いろいろな問題があるかと思えますけど。でも、下田は昔、ペリーが来たときにですね、他の横浜とかの街はこう陰に隠れたらしいんですけどね、下田の人間はついてって、あの、いっしょにワイワイやったっていうそういうことが、記録が残ってるみたいなんです。性格的にはどちらかというとなつっこいのかもかもしれませんね。

(森) あのね、下田の人間っていうのはね、足を引っ張るのが特徴なんです。下田の市民というのは、だから、例えばね、楠山さんとか田中さんがぱつとやるでしょ、必ず足を引っ張るやつがいるわけ。よこっちゃで。じゃあお前がやったらどうだっていってもね、結局はやらないんだけれども、影でごちょごちょ言ってみたり、そういうのが多い。そういうのがね、最近ちよいとよくなってきたんだけれども。

で、下田がかつて何十年か前は、海水浴場がこれだけあれしてるときに、下田の観光客ってのが 600 万弱の観光客が下田に来てたんですよ。それが今、300 万いかないでしょ。200・・・半分くらいまでおちこんでる。で、落ち込むわけ。今テレビなんか見てて、ほらあの、温泉だとかやるじゃないですか。あれみてね、まず価格的にみるとね、だいたいこんなところで 1 万 2 千円、1 万 5 千円。下田なんか夏になれば大体 2 万とってるからね。来るわきゃあないっての。電車は高いし。雨が降りゃあすぐ止まっちゃうし、そんなとこへね、高い金払って来るわきゃあない。今白浜が一番悩んでるのはなんだかね？ 民宿を続けていくかどうかってね。来年おそらくさうとう民宿なくなりますよ。うん。価格がね、あの、白浜から下田の入り口に伊東園っていうのがあるでしょ？ あれが 2 人で 1 泊 6800 円。1 泊 2 食付で。これはね、年間変わらない。1 人 6800 円。下田はね、夏にちょっと高くなる。正月にはいると、ちょっと高くなる。昔に比べるとちょっと狭まってるけど、昔は倍くらいになった。そういうね、特別期間っていうのがあった。ところが今は、ホテルの全国的な展開やってるあれなんだけれども、1 泊 2 食で 6800 円ですからね。みんなきますよ。白浜がね、今年、素泊まりで 6500 円かな。

(田中) 今回いくらですか？

(寺村) 今回 2 泊で食事付で 1 万ちょっときるくらいで。かなり安い。学生割引で。

(志田) それは安いね。5000 円くらいで 2 食ついてね。

(田中) 食事は絶対民宿の方がいいですからね。まちがいなく。

(森) 今ね、素泊まりでそんな値段をとるようならね (だめだよ)。今ね、下田へ来た外人がねすぐそのね大伊豆って小さい旅館へね泊まるわけ。素泊まりで 3500 円。そうするとね、外人の旅館のガイドブックにね、大伊豆、大伊豆ってね、小さい旅館なんだけれども、大伊豆って書いてあって 3500 円。外人がものすごく泊まるんですよ。だからもうね、頭の中の切り替えをね、どんどんしていかないとね。下田のね、ちょっと外れたところに、お袋饅頭っていう、おばあちゃんがたでお饅頭を作ってるところがあるんですよ。そこはね、はじめは饅頭だけ作って売ってたんですよ。そのうちにね、もう、奥の方なんです。饅頭売ってるうちにね、だんだんその、味がいいっていうんで、お客さんがこう、そのうちに地元の野菜を売ったりし

てね、今ね、年末にね、全員でねハワイ旅行。饅頭の利益で。今ね、10人くらい居るんだけど、10人くらいで全部で5泊6日かそこらで、それを全部その饅頭屋さんが売上のあれを持って。またそのおばあちゃん連中がそれを楽しみにしてね、がんばるから、売上が毎年上がって。ほんで、昨日ね、ちょっと外れたとこの野菜なんかをおいてるとのを大将と話しなんかしたんだけど、野菜なんてね、きゅうりなんて3本で100円だとか、利益なんてこんなもんですよ。こんなもの。特に便利なとこで売ってるわけじゃないんだけど、そんなところで、掘建て小屋で売って、あの、今年商おそらく1億ある。野菜だけ売ってるんだよ。他のものは余計なものはない。だから1000円以上のものなんて一切ないんだから。今、下田の商店で、年商1億あるお店なんて。

(田中) すかいらーくでお店があるんですけどね、そこ1億、夏。こえるって。

(森) すかいらーくは、日本全国でも下田のすかいらーくが一番いいって言われる。それで1億2・3千万。だからいま、そんなもんなんですよ。

(寺村) つまり、こう、意識を変えていってるところはうまくいったりしてるけれども、変えていってないところは・・・っていう

(森) 昔のように考えて商売やっているとところはおそらくね、続かないでしょうね

(田中) 野菜なんかね、新鮮なんですよね。

(寺村) 今の旅館の話聞いてますとね、この間熱海とか伊藤にも調査に入ったんですけど、やっぱり旅館の経営者のかたは、そういう人がおおくて、昔のわあ〜ときて、わっと使って、わっと帰ってっていうので、満員に詰め込んで1人何万円もとってっていうその時代が懐かしくて忘れられないっていうのが。やっぱり、そういう夢をもう一度って言うところがあるって。

(森) いま、団体って言うのが、ほとんど無いでしょ。大体多くても5・6人のグループで来るっていう。その目的も、意外だと思っのはね、伊豆はね、温泉っていうので来る人が一番多いんですよ。温泉なんて全国でどこだってあるんですよ。東京にもあるしね。静岡だって焼津までいきゃ駅前にあるじゃない。ああいうふうに、どんどんあるのに、下田へくる観光客の一番の目的ってのはやっぱり、トップは温泉だって。

(寺村) ちょっと話は変わるんですけど、市からいただいた観光客の数の表がありましてね。温泉旅館宿泊客なんです。この表でいくと、平成12年に53万人に。これがボトムなんですけど、今119万人、平成18年に。かなり回復してるっていう表なんですけど、ただ、下田市の統計書を見るとここまで極端ではないですけども。やはりでも、近年回復していると

いう数値が出てるんですが、皆さんの活動なんかも影響してきているっていうに考えてよろしいんでしょうかね？実感的にはどうなんでしょう？

(志田) 家の方のおりを通るようになったのは、完璧に通らなかった人たちがマップをもって通るようになってきましたもので、通りとしては、寂しい通りから逆に市民の方も朝の散歩とかそういったものは逆に、他の通りを通るよりは、ここの通りを通った方がいいわって感じで。そしてあの、1回じゃなくて1回来るとまたっていう人たちが多くなってきましたのですね。それだけは、うれしいなとおもうんですね。リピーターがねあの、あるってことは。

(寺村) 市外の人でリピーターってことで？

(志田) そうそう、そういうことね。あの、山梨の方とかね遠い人とかだと福島の方だとか「去年も来たんだけど、したら、碁盤の目でちょっとわからなくなって、ここへくるまでに、ちょっと通りを間違えたから」って言ってね。そういつてきてくれるか方たちがいらっしゃるものですから、それはうれしいなあって感じがありますけどね。

(田中) たぶんですね。宿泊の数が増えてても、単価はねたぶん下手すると半分ですよ。きつと。だから、数増えてても、そんなに儲かってはないと思いますよ。旅館さんなんか。

(寺村) ただ、数が増えるってことは、旅館にとっては単価が下がればあんまり変わらないかも知れないけど、街としては例えば、まちを歩く人が増えるとか、雰囲気にかかわってくると思うんですが

(田中) 8月はだめなんです。全然。とにかく街の中へ入ってこないんですよ。人が。雨降ったときはまあ、別ですけども。その他は少しずつ増えてますよね、歩く人は。明らかに。

(森) あのね、要するに下田ってのはね、商店街ってものはないの。ないとおんなじね。全然ダメダメ。だって、ぱっとしないし、夜は早く皆閉めちゃうしね。だから、昼間と朝、どんだけ歩いたかっていう。そういうぐらいね。我々からみるとよく商売やってるなあって思うくらい、早いね、閉めるのが。

(田中) 飲食系は多少もしかしたらあれかもしれないですけどね。飲食系以外はだめでしょう。やっぱり、下田へ来て、地の魚食べたいって方は結構多いですよ。

(志田) どこがおいしいですかって必ず(聞かれます)、ええ。

(楠山) あのね、あの下田のまちっていうこのエリアっていうか、この規模は、伊豆の中では特に南伊豆地域では唯一のエリアなんです。あとはほとんど漁村だったり農村だったところ、いまも漁村なり農村をやる。あるいは稲取みたいに、あそこは漁村だったところが民宿からスタートして、ああいう温泉街というかホテルが立ち並んだところであってね。それ

が、人が要するにたまるというか、「うずる」というかそういう風なエリアは、南伊豆地域で唯一この町なんです。で、南伊豆地域の全ての行政の中心地であり、教育の中心地であり、文化・経済など全ての中心で、周りの人たちがここへきて、っていう町なんです。それがまあ、いろいろな役割のなかで衰退してるっていうのはあるけれども、その、何故我々がこの街にその、商店街がないって自分が商売やってるくせに言うけれども、ね、アホゲな商売をこの人らやってるでしょうかと（笑）。ね。でも、こういうエリアがあったときに、たまたま幕末の開国の歴史というときに、あの、ペリーとかハリスとか、プチャーチンとか言う人が来て、ね、あるいは吉田松陰が来て、幕府の老中が来て、という中で、全部施設を、お寺を使ったんですよ。それは、幕府の命令の中で、ここのお寺はこういう役割で使いましょう、了仙寺、ここは、調印する場所にしましょう。（玉泉寺には）敵を防ぐのについていう画策にのっかって土手があるんですけど、そこには当時亡くなった米兵とロシア兵の墓がずっとあってね、150年間以上それを下田の人たちは我々の祖先を大事に祀ってくれてるということで、アメリカやロシアの人が来ると必ずあそこへお参りしてきて、ありがとうございますというようなことがあったりするんですけど、たまたまあそこはそういう外人さんがなくなったらあそこへ埋葬するという場所と決められてたからそうしたんであって、そこのお寺が「うちががんばるよ」って手を上げたわけじゃないんだけど、でも、そういうことが、場所がこう、街の中に点在していて、それが今観光施設として使われてるわけね。皆さんが来たときに、昔の幕末の歴史のときにここはペリーが来てこうやったとか、ここはこうだったとか、それがまちの中に点在してるわけですよ。そうすると、そういう意味からしても、このまちの中全体がある面でテーマパークみたいなものに位置づけないといけないわけね。これ全部、商店がなくなって、生活者が居なくなって、お寺と観光施設だけ残ったときに、皆さんが来て「いいまちだと」思うかなんです。やっぱり、観光施設を見ようと思うには、そこに、生き生きとしたねテーマパークとしての状況がなければいけない。するとそこに、産物を提供するお店があったり、ここに住んでる人たちの生活が見えるようなお店があったり、っていうからこそ来て、幕末の歴史をたずねながら、下田の町が楽しくなるんであってね。ただ、幕末の歴史の施設だけを見て楽しいわけがないですよ。そういう意味からして、どうも、この街が全国共通項でまあ、沈んできていると。で、ここを沈ませたら、たぶん南伊豆地域の大きな拠点がなくなってしまいうだろう。下田が無くなったから、次どっかの場所が立ち上がるだったら、もう一所無くなるだろうと。だから、ここはともかく南伊豆地域のシンボルとしてね、やっぱりここを大事にしなければ。ここが元気づけば、さっき言った農業との関係、漁業との関係、林業とかそういう関係をきちっと作る

ことで、ここのがんばりを全部一次産業の支援に回ってくっていう。それで始めて地域の自然とかそういうものが維持されるんだよね。で、さっき言った旅館さんあるでしょ。旅館さんの文句を言えば、あと1に時間も2時間も皆言いたいこといっぱいあると思うんだけど、ね、でもね、旅館さんも旅館さんで、それだけががんばってるけど。本当に今がんばってる、例えば湯布院の旅館ね。「むらた」とか「亀の井別荘」とかね、ああいうとこ。1泊5万円で、夫婦で行って10万円かかる。ネットで調べてごらん。ほんとに、1年満杯だよ。要は。そんで、リピーターも多い。また、来年来ようねって言う。それだけの金額を出して。だから、安けりゃいいってもんじゃない。でも、そのところ、その旅館だけじゃなくて、由布院の旅館の人たちが胸張って言うのはね「旅館は地域のアンテナショップだ」って言い切るんですよ。自分たちは、この地域のアンテナショップっとして、表現者だって。だから、食事も何も地域のものをどう使って出すか。器もどうやって出すか。ね。そして、これをすみませんほしいですけどっていったら、「あそこのお店にありますからどうぞ」って案内する。要するに、そういう風なこと言い切る、そこまで徹底的にやってきたから、今天下取ってるんだけどね。最初は天下取れなかったから、ああいう風にならないうけどね。それを、下田でもやりたいんだ。各店が。だから、この街が南伊豆地域のアンテナシティというかね、それにならないと、南伊豆は、南伊豆地域ね、この伊豆半島のから半分の、ここは、これから活路はないだろうと。と思って、このまちを見て、なんだかんだっていろんなポジションの中でやってはいるんですけどね。

(田中) あかね、一番大きいのはですね。昔どうだったかっていうことだと思うんですね。下田の町は、昔、はやったんですよ。あの、所謂日本のハワイだとかで、新婚旅行のメッカで、非常にはやった時期があるんですよ。で、たぶん、由布院のことよく知りませんが、向こうはたぶん、まあ極端に言えばお客さん0の状態の世界から始まって、それがね、その旅館の人たちと周囲の人たちとの協力体制ができたんだと思う。皆でやんなきゃ、とにかく地域がだめになっちゃう。それがもう、いきなりできてるんですよ。下田は一回それがあったもので、まだその亡霊を追ってる人が多いもんで、協力体制が取れない。これがね、僕は非常に大きい原因じゃないかいつも思ってますけれどね。これは根本的な原因ですよ。

(森) 亡霊じゃないんだけどね。私は、東京から戻ってきて、店入って、まあ、四十何年前だね。こここの通りね、この通りに、立ってこうね、見るとね、人でね先っぽが見えないんだよ。漁師で。鯖舟がね、どーんと入るとね、入ったときにはね、ほんとにこの通りは人でね歩くのが大変なくらい。っていうのはね、銭湯があったわけ、向こうに。向こうに銭湯が1件あ

ってね、銭湯が4件くらいあった、この近辺に。それでね、海の、この先っぽの海のところには、八百屋がね3件か4件あったかな？こいつらなんかぼろもうけだから。値段なんかどうでもいいんだから。とにかく船にぶちこみやあいいんだから。うちらなんか薬局やっててね、とにかくもう鯖が揚がったときには、もう漁師がね値段のことなんか一切言わない。なんとなんと何くれって。1人がもう、あの当時で万単位で買うんだから。その代わり、漁がないときは歯ブラシの一番安いのをくれとか、そうなる。だけれども、いいときのほうが良かったから、鯖なんてのは道に転がってるんだから。取れすぎちゃって。で、そのくらいのいい時期ってのを私は見てるわけ。で、それがだんだんこういうふうになってきて、今度は船がダメになって、ダメになったために、ああいう麦端にある八百屋だとかそういうのは今ほとんどないね。んで、それから10年20年くらい、今度は海に来る人で夏がものすごく最高にあれしたときには、私なんかはすぐそこで店開いてるときに大体1時か2時ごろまで店やってた。それでも人きた。それは何できたかって言うのは、白浜海岸。キャンプ場をやってたから。あの浜、キャンプであ〜っと。そいつらが悪すぎて、キャンプ廃止になった(笑)。だけど、そいつらが夜中になると街へ出てくるわけよ。来るから店開けてるわけ。だから、我々なんか、ホントいい商売やってた。で、こういう波があって、こうきて、こっから今度上がらないわけ。今。もうこうなっちゃって。もうこれがそのままこうど〜って下がるのか、少しずつでも上あがっていくかって言うのが、これからの大きな課題だと思うんだけどね。さっき楠山さん言ったように、ここが中心。俺がやってるときにはね、この旧町内って呼ばれてる辺りはね、薬屋がね十何件在ったわけ。今2件しかないから。で、この下田市で資生堂化粧品を扱ってるところは20件近くあったわけだ。今はやっぱ2件しかないや。それは何だって言うとな、ドラッグストアができた。ドラッグストアが下田に4件。あれしたわけでもって、一気に薬局がばあ〜ってだめになっちゃった。だから、そういう時代の流れももちろんあるんだけれども、今ここで地元の人たちが、何らかの形でがんばらない限りはね、やっぱりもうどんどんどんどんおってくでしょう。下田のドラッグストアも、あと今4件あるやつが、私は、あと何年持つかないっていう。おそらくもう、これからはドラッグじゃなくてコンビニの完全に時代に入っているから、おそらくコンビニが勝って、ドラッグはおそらく4件在るうち下手すれば3件なくなるだろうっていう・・・、ってふうには見てます。

(田中) 今、ドラッグストアって市場争いをしてますよね。あきらかに。

(森) 要するに、点取り虫みたいなもんで、ドラッグストア、そうでしょ？静岡でもドラッグストア見て店の前に並んでるのはインスタントラーメンかこういうあれか、そんなもんでしょ。

ねえ。本体のドラッグストアって薬屋なんだから。薬なんか奥行かなきゃないんだから、店の前に並んでるのは、なんでインスタントラーメンなんか薬局が売るのが？って。一番当初は皆そうだったの。

(楠山) あのね、あの、何年か前に静大のね、大谷 (おおや)。ですか？あの大谷の地域。もともと大学がちょっと来て、もともちょっとあったでしょけど、商店街とか形成されて、で、学生が利用されて、こうしていったけど、当然そういうね、商店の構造が変わってきてで、5・6年前、もうちょっと前だな。静大の学生が再生計画をなんか皆で作ってやってみないかって、いうあれがね、やっぱ大学の町だから、なんとかできないかなあということで活動をしたなんてこともあったみたいけど。まあ、なかなかねその程度では回復できるような状況ではないというような。ただ、近いところ行くと、呉服町ってあるでしょ？基本的にはあそこにあんだけのデパートがあるでしょ。駅のね。そうすると、あれで、本来呉服町なんて無くなって然りの構図ですよ。どこでもね。でも、なんとなくがんばってるでしょ？あそこ。あれは中身結構やってるでしょうね。で、それ一番今作ってるのは、1点1品運動っていうね、各店の1品っていうのをね、毎年こうみんなで掘り起こしていきながら、呉服町商店街っていうかたちで広報をして、あの忙しい、楽しい呉服町っていうイメージを作ろうと。っていうことで、がんばって何とか。普通の構図だともうあれだけ駅前にデパートがあんだけあれば、普通の都市ではあの商店街は皆もう無くなるわね。どこでもね。あの、岐阜の商店街なんかもほとんどもう柳ヶ瀬なんてもう閑散としたかたちが・・・でも、やっとう、なんとか大きなところとコラボをもってってあの、思い始めてるらしいけど。ね。

もうひとつの岐阜の根っこは名古屋ですよ。名古屋に近すぎるよね。岐阜で買い物じゃなくて、名古屋へも行ってちょうからね。岐阜の駅前の戦いじゃないもんなあ。

(寺村) なんかあのう、ペリーロードの辺りでも新たにこう少しずつできてるけれども、こう、もっとう、ひやかして歩ける「量」というのが、あつたらいいかなあという風にさつき、まあ歩いてみて思ったんですが・・・。

(森) あれはねえ、あそこの連中の内部分裂。あれはもう下田の一番の特徴を現してる。3グループくらいあるんですよ。あんな通りで。ほんで、お互いに足ひっぱりあって、ひっぱりかえってるから。何かやろうっていうとねあと2つのグループがね、全く協力しない。ほんでこうなるんだよなあ。

(楠山) あのね、空き店舗があるじゃないですか。ずっと。まあ、なかなか下田で商売やっとうまくいかない、ってのが前提にあるんですよ。でも、やっぱり、そういう人がいない限り、

空き店舗はシャッター開けて商売始まらないわけですから。でも、ひとつは、「貸さない」、ひとつは「借りない」。で、なぜだと思う？まずねえ、ひとつは基本的に持ち家で商売してる人が多いんですよ。根本的に。要するに。そうすると、場所が悪くても、場所のいいところを借りると家賃が発生するじゃないですか。そうすると、自分のここでやってたほうが家賃がなくて楽だ、みたいな所があって、通りを形成しきれない。例えば、おっしゃるように、ペリーロードのところに、あそこにみんなこうこっちからどうせ客が来ないなら、みんなあそこに並んでこう上手なテーマみたいな感じでできればおもしろいじゃないのっていう風にいうかもしれないけれど、移るたびに借りなきゃならないから、家賃が発生するからあの、家賃で借りてる人はどこ行っちゃって家賃だから動きやすいけど、持ち家でやってる人とはまず動かない。今度は、貸す人も、なかなか貸せない。ひとつの住宅事情があって、自分で下を店舗にして2階3階に住んでる人ってトイレと水周りが1個しかないんですよ。自分がやってるから1こでいいわけですよ、店の。下を貸すと、下にトイレがあると、2階にトイレがないから、下を他人に貸すと、トイレを作んなきゃなんない。下を自分のことで使うとなると、店の中にもう一個トイレを作んなきゃならない。で、そういう自分がやるために作ってあるんであって、貸し店舗用に作ってないものですけど、貸すって事がまた余計な投資になるっていうね、そういうことがあったりしてね。意志の少なさもあるけれど、いろんな事情がからんで、なかなか、ですわね。

(寺村) 大分予定した時間に迫ってるんですが、では、最後に、合併の話がありますけれども、これは皆さんの今の「まちおこし」にとってどういう関係があるのかなのかっていうのは、どうですか。ちょうど松崎が反対していたのが進みましたよね。

(田中) 自分たちの活動に結び付けてどうのこうのっていうのは考えてないですね。ただ、今のままだと、全部だめになるっていう感覚が、僕ら強いので、ですから、同じ。今のままではだめになる。合併しても苦労するんですよ。どうせ苦労するんだったら、一緒になってから苦労した方がいいんじゃないの？っていうのは私の考え方ですけどね。

(楠山) 私はね、合併というものはある面で必要悪かもしれないですね。ただ、それをどこ行っても、現実論としてね、これから合併をっていうかたちでね行政っていうシステムを変えていかない限り行政サービスを受けられなくなっていくわけですから、それはもうなんか無機質なものとしてやっていかざるをえないと思う。それによって、例えば住民サービスがおろそかになってくるとか、地域間が分離してくるとかそういうマイナス面が出てくるわけですよ。で、それをどうやって埋めていくかっていうのは、1つは人の力ですよ。で、地域を知り、そのね

自分たちのコミュニティを自分たちが作り上げてくって意志なり組織なりを作っていないと、そういう意味からすると地域間競争になると思いますね。だから、良し悪し、なんていうかなあ、もうねあ、新聞だとかに載ったりだとかいろいろあるじゃないですか。報道されるでしょ。悪いことを、いいとは載らないと。ただ、いいと載ったからってそんなにうまくできている地域とはそうはないんですよ。その、いわばね。だから現場にくるって希少だと思うんだけどね。いうほどうまくは行ってないんだけど、でも、がんばってるっていう状況ね。だから、浜松が合併のときに、佐久間町は、昔の佐久間町の単位でNPO佐久間ってうのを作ったでしょ。要するに、昔の佐久間の人間が自分たちの手で佐久間を何とかできないかっていうゆうね。そういう、地域が自分たちのコミュニティを作ってくっていう、活動をドンだけできるかが地域間の競争だし、地域間の格差になると思う。それは、指導する方は行政マンがしなきゃいけないかもしれないけれど、やるのは民間ですから、いかに民間活力が充実していくかっていうのが地域の元気さで、これが合併と同時にできなくなると、たぶん、行政サービスは荒くなってくだろうし。その、合併して何が良くなったのっていうことだけで、ずっと行っちゃうと思う。そのマイナスをプラスに、そこまでいなくてもマイナスを消すっていう力をこれから合併する前の官と民が相当知恵を使って用意周到にやっていた地域が、合併後、勝つだろうな。

(田中) 下田はまだ中心ですからまだいいですが、周りのほうが逆にね対等合併だっていっても吸収されるっていうイメージを持ってるんですよ。だから、逆に、松崎はああいう形でちょっとわかっていると思うんですけど、南伊豆町のほうが逆に合併に反対してるひとが多いかもしれないですね。共立病院の問題がひとつあるんで。南の人に聞くとおもしろいかもしんない。

(寺村) ありがとうございます。時間も過ぎましたし、これから「らくら」と「南豆製氷」の方にも行きますので、まだまだお聞きしたいこともあるんですけど、この辺でお開きにしたと思います。今日はお忙しいところ本当にありがとうございました。(了)